

「マ・メール・ロワ」は ペローの童話集で日本では主に「マザーグース」という英名で親しまれています。

モーリス・ラヴェルは無類の子どもも好きでした。
この曲はもともと子どもが楽しく簡単に演奏できる
ピアノ連弾曲として作曲されました。

その後、とても評判が良かったために
オーケストラ付きバレエ曲としても編曲されました。

今回、演奏するのは
「バレエ版 マ・メール・ロワ」です。

字幕で、曲ごとの情景を解説しながらお送りします。

遠い昔のお話・・・

深い森の中にお城がありました。

奇妙な鳥たちがさえずり、響き渡る森・・・

木々のざわめきも神秘的な深い森・・・

ある日のこと

このお城に住む王様とお妃様に
フロリーヌというお姫様が生まれました。

長いこと子どもに恵まれなかった王様とお妃様は

たいそうお喜びになり、
盛大な祝宴が開かれました。

この国にいる妖精たちも
一人残らず招待されました。

けれど・・・

いちばん齡をとった魔女だけは
招待されませんでした。

魔女はたいそう怒り

こう言い放ちました

「フロリーヌは糸つむぎの針で手を刺し・・・」

「そして・・・」

「 命を落とすであろう！！ 」

それから16年たったある日・・・

お城の庭で
一人の老婆が糸車を回しています。

カラカラ カラカラ
糸車は軽やかに回ります。

そこへ一人の若い娘がやってきました。

16歳になったフロリーヌ姫です。

魔女の不吉な予言など

まるでなかったかのように

姫はたいそう美しく
すこやかにお育ちになられていたのです。

糸車がまた軽やかに回りだします。

そのそばで
フロリーヌが楽しく遊んでいます。

誰もが 魔女の呪いのことなど
忘れかけていました。

しかし・・・

魔女の呪いは解けていませんでした。

フロリーヌは

まるで引き寄せられるように
糸車に近づいていき、

おもむろに
手をのばしました。

そして どうとう

糸つむぎの針で手を刺してしまったのです！

フロリーヌは気を失ってしまいました。

家臣たちがおどろいて駆けつけます。

「大変だ！」

「フロリーヌ様が！」

「しっかりしてください、姫様！」

「ああ、どうか！」

家臣たちが
懸命に目を覚ませようとしませんが、

フロリーヌは死んだように
目を閉じたままです・・・。

フロリーヌが目覚める気配はありません・・・。

魔女が予言したとおり

死んでしまったのでしょうか？

人々が悲しみにくれていた その時、

突然

糸車の前に座っていた老婆が立ち上がりました。

老婆がよごれたケープを脱ぐと・・・

そこにはなんと

老婆ではなく 美しい妖精が
微笑みかけているではありませんか！

妖精はこう言いました。

「フロリーヌ様は死にません」

「そのかわり、百年間眠ることになるでしょう」

そうして妖精は、魔法で
城の人々も眠りにつかせたのでした。

すると今度は
二人の黒人の子どもが現れました。

二人の子どもは眠る王女に恭しく挨拶をします。

妖精は彼らに王女を見守るように言います。

そして王女の眠りを
「おとぎ話でなくさめるように」
と命じました。

二人は王女の夢の中へと入っていきます。

～美女と野獣の物語～

むかし、あるところに、
ベルという優しい娘がいました。

あるとき、ベルの父親が野獣の館に迷いこみ、
野獣を怒らせてしまい・・・

娘を生贄に差し出さなければ
ならなくなっていました。

ベルが泣きながら館へ到着すると、

そこには立派な家具やピアノ、
豪華な食事のある部屋が用意されていました。

そこに、野獣が現れました。

ベルは恐怖のあまり、ふるえています。

野獣は言いました。

「さあ、食事をおあがり。
お腹が空いているだろうから」

「あなたは見かけによらず
とても優しい方なのですね」

「ありがとう。
だが、私の姿は怪物そのものなのだ・・・」

「姿は人でも、あなたよりも
怪物のような人間は大勢いますわ」

「ああ、ベル。 ありがとう。

私に才気があれば、

もっとうまくこの気持ちを伝えられるのに・・・」

「・・・お願いだ。
私と・・・私と結婚してくれないだろうか？」

「ああ、野獣さん……。ごめんなさい……。
それは、できませんわ……」

野獣は大きなため息をつきました・・・。

あるとき、ベルは一週間だけの約束で
家に帰ることを許されました。

しかし、楽しい時間はたちまち過ぎ、
約束の一週間はとうに過ぎてしまいました。

ベルはハッと約束を思い出し、
急いで野獣の館へ戻ります。

館に着くと、なんと
野獣が庭で死にかけているではありませんか！

「ベル、お前は約束を忘れてしまったのだね。
でも、
死ぬ前にもう一度お前に会えて嬉しいよ・・・」

「死なないで！ 私の大好きな野獣さん。」

「どうか・・・」

「どうか私の夫になってください！」

するとどうしたことでしょう。

野獣の姿は消え、

そこには美しい王子様が
立っているではありませんか！

王子様にかけていた
悪い魔女の魔法が解けたのです！

再び二人の黒人の子どもが現れました。

二人の子供は眠る王女に恭しく挨拶をします。

二人はまた王女の夢の中へと入っていきます。

～おやゆび小僧のお話～

日暮れの森の中・・・。

広い森の中に、木こりの夫婦が暮らしていました。

夫婦には7人の子どもたちがいました。

一番下の子は、生まれた時から背が小さく、
おやゆび小僧と呼ばれていました。

木こりの夫婦はとても貧乏でしたが、
幸せに暮らしていました。

しかし、あるひどい飢饉の年、
食べるものが何もなくなってしまい、

悩みに悩んだ末にとうとう

子ども達は森に捨てられたのでした・・・。

夫婦は深い悲しみに、
打ちひしがれていました。

子ども達は広い森の中に残されたまま・・・。
帰り道も分かりません・・・。

しかし、賢かったおやゆび小僧は機転を利かせ、

道するべに、パンくずを
落としてきたから大丈夫だと、

皆を安心させ、眠りにつきました。

しかし、翌朝帰ろうとすると、

パンくずは、森の小鳥たちに
全て食べられてしまっているではありませんか！

パンのかけらはまったく見当たりません・・・。

おやゆび小僧達は
悲しげに深い森へと去っていきました。

再び二人の黒人の子どもが現れました。

二人の子どもは眠る王女に恭しく挨拶をします。

二人はまた王女の夢の中へと入っていきます。

～パゴダの女王 レドロネット～

二人が入った夢の中は、
まるで古い東洋の国のようです。

魔女の呪いで、
この世でいちばん醜くなってしまった
レドロネットというお姫様がいました。

やさしい心を持ち、賢く育てられた彼女は、
散歩をすることが好きでした。

ある日、レドロネットが
いつものように森を散歩していると、

とても恐ろしい姿をした
緑色の蛇と出会いました。

彼女はおびえて、逃げ出しますが
緑色の蛇は追いかけてきます。

とうとう浜辺まで来てしまった彼女は
小舟で海へ逃げました。

ところが嵐に襲われて、
小舟は沈んでしまいました。

レドロネットが気がつくと、
そこは見たこともない立派なお城の中でした。

どこからともなく、陶器でできた
小さな人形たちが大勢集まってくると・・・

なんと、一斉にひれ伏すではありませんか！

人形達はあざやかな模様と、
ダイヤモンドやサファイアで
飾り立てられています。

「レドロネット様、
ここはあなた様の為のお城です」

「私たちパゴダの人形は、
あなた様のお世話をするよう」

「また、あなた様の望みをすべてかなえるよう、
ご主人様から言いつかっております」

そして、パゴダたちは、
クルミの殻で出来たギターや

アーモンドの殻で出来たバイオリンで、
楽しい音楽を奏ではじめたのでした。

ゆかいなパゴダたちに囲まれて、
レドロネットは楽しい宴の時間を過ごすのでした。

・・・遠くで角笛の音が聞こえます。

妖精に導かれ、この国の王子が古い城の近くへ
狩りにやってきたのでした。

空が徐々に白んでいき、
長い長い夜が明けようとしています。

鳥のさえずりも聴こえてきました・・・

王子が
「あの深い森の向こうにそびえる高い塔は
いったいなにか？」
とたずねると、従者は言いました。

「わたくしも50年以上も昔に
父親から聞いたのですが・・・」

「なんでも、あの古ぼけた城には
美しいお姫様が眠っているそうなのです」

それを聞いた王子は、
いてもたってもいられなくなり、
深いいばらをかきわけて、
お城に向かったのです。

フロリーヌが静かに眠り始めてから、
もう百年あまりの時間が過ぎていました。

深く眠り続けるフロリーヌに
徐々に光が差し始めます・・・

王子たちがお城に入ると、
兵隊や召使いたちも、みんな眠っていました。

王子はあの塔の中へと入っていきます。

塔の一番上の小さな部屋に入ると、

美しいお姫様が眠っているではありませんか。

王子は思わず
彼女にやさしく口づけをすると・・・

フロリーヌはゆっくりと目を覚ましました。

魔女の呪いが解けたのです。

フロリーヌの目覚めと共に、
眠っていたお城の召使い達も

次々に目を覚まし、人々が集まってきます。

人々が王子と王女を讃えます。

「フロリーヌ様、バンザイ！」

「王子様、バンザイ！！」

遠くで妖精が
みんなに微笑みかけているようです・・・。

La Fin

